日本初の国立重度知的障害児施設 秩父学園誕生の背景

―ニーズ分析と初代園長菅修の思想の探究を中心に―

帝京平成大学　○園川　緑（8259）・中嶌　洋（5048）

〔キーワード〕　重度知的障害児　菅修　手をつなぐ親の会

１．　研究目的

1958（昭和 33）年に創立された国立秩父学園は日本で唯一の国立知的障害児施設であるが，これまでその創設背景が明確にされてこなかった．同学園の創設を促進させた要因はいったい何であり，何を目的に創設されたのか．これらを明確にすべく，本発表では，その背景要因を具体的に抽出することを目的とし，当時の知的障害児のニーズを分析すること及びキーパーソンの思想を探究することを研究課題とする．本発表は，知的障害児福祉の理解の深化並びに知的障害児福祉領域の実践強化を志向する研究の第一弾である．

２．　研究の視点及び方法

本発表では 1950 年代前後の国会議事録，地元新聞紙，機関誌などの史的資料の収集・分析に加え，さらに関係者への聞き取り調査から設立当時の経緯や実態を把握した結果を報告する．その際，国レベル，県レベル，市レベル，個人レベルと段階的に検討する．

３．　倫理的配慮

原資料に基づき，「精神薄弱児」「盲精薄」などの不適切な言葉を引用部分のみに使用したが，差別的な意味合いを示唆していない．また，2012（平成 24）年 3 月 12 日，当時の国立秩父学園職員にインタビューし，それについては研究の範囲での使用許可を得ている．さらに，匿名性に関し，新聞報道記事や雑誌内で民間人等の個人が特定されると推測される場合には，適宜，記述を省略したり，イニシャル表記することで十分配慮した．

４．　研究結果

1958（昭和 33）年当時，民間ではなかなか受け入れ難い実情にあった重度知的障害児や重複障害児を受け入れる施設として，国立秩父学園は埼玉県所沢市に誕生したが，その背景要因の探究から以下の事柄が明らかになった．

（１）背景要因Ⅰ：国レベル

国会会議録検索システムの検索結果から，国立秩父学園が設立される直前の 1958 年 3 月～6 月の間に，国会内部では次のような切実な意見が出されており，国レベルで知的障害児の日常生活が問題視されていたことが明かされた．「現実には精神薄弱児にいたしましても百万人もある．……適切な措置を打ちたいとしても，そういう方の施設，設備が充実されていなければ，適切な措置が現実には取れない……（1958 年 3 月 13 日）」，「身体障害者だけではなく，精神薄弱者についても……考慮してまいりたい．（1958 年 3 月 18 日）」，「精神薄弱児施設でありますとか……保育力の充実ということが，これは第一の問題だと思いますので……（1958 年 4 月 15 日）」，「……具体的な計画を促進されて……声なき声を十分聞いてやっていただくような努力をひとつしてほしい……（1958 年 6 月 24 日）」．

（２）　背景要因Ⅱ：県レベル

上記とほぼ同時期に,『埼玉新聞』紙上で,「『秩父学園』店開きへ」(1958 年 3 月 22 日)と大きくとり上げられ，人々への理解浸透を押し進めたと考えられる．一方，“忘れられた子らに愛の手を”という見出しが付された記事から，当時の知的障害児数に対する施設入所定員数の圧倒的な少なさが問題と指摘され，ここからニーズ充足の緊要性が窺い知れた.

（3）背景要因Ⅲ：市レベル

『日刊新民報』(所沢市域）紙上では「所沢に精薄児の施設を」(1956 年 6 月 21 日）と題して,「罪もない彼らが放置され，その家族がそのためにいい知れぬ悲しみを背負っているのを社会はそのまま見過ごすべきではない……」という投書がとり上げられ，知的障害児を巡る問題が個人や家族のみの問題ではなく，社会的問題であることが認識された.

（4）背景要因Ⅳ：個人レベル

① 全日本手をつなぐ育成会会員の事例を通して

機関誌『手をつなぐ親たち』には,「どこに行っても相手にされないということは，教育の対象にならないと云はれたこと丈で，すべてつきてしまい共に目のくらむ思いをした.……」(1957 年）と重度の重複障害児はどこに行って門前払いだった様子が語られ，知的障害児福祉ニーズの間隙に潜在的ニーズが存在していたことが明かされている.

② 初代園長　菅修の思想の探究から

初代園長の菅修は，ひばり学園園長だった当時，国立秩父学園の設立に関わった．厚生省に懇望されて（田ケ谷 2012）国立秩父学園初代園長に就任したという菅は,「精神薄弱の教育とか……難しいことでありますから，しょっちゅう研究を進めることが必要であり……」(菅 1968）と述べ，教育の対象外とされている子どもたちこそ教育しようとした．また「リハビリテーションを強化しようとする施設は，たよりにするには旺盛な福祉精神とたゆまない創意工夫とである．これらを怠れば……障害は日増しに悪く……精神薄弱の程度が重くなればなるほど，その危険は大である」(1973）と重度の障害を持つ子どもの対応の難しさや施設の役割を言及する．さらに,「精神薄弱児（者）の生活を安定させないで，およそ……治療などがうまくゆく筈はない」(1973）と療育の必要性を主張していた.

５． 考　察

1950 年代には, 家庭だけで重度知的障害児を育てる苦難や保護者の苦労が多くの記録物に記された．重度知的障害児や重複障害児を受け入れてほしいという時代のニーズを受け，多くの人に望まれて同学園は誕生した．施設設立に向けて幾つかの働きかけがあったなか，菅修は初代園長として尽力した. その背景に, 時代のニーズを社会に訴えていく人の存在，そのニーズを受けとめる人の存在，それに賛同する多くの人の存在があった．同学園の設立の背景には，そうした多くの人々の力の結集があった．他方，学園創設が十分な受け皿になりきれなかったところに，知的障害児福祉ニーズの多大さが示唆されていた.

「障害が重い子こそ，教育を」と述べた管は，その後も障害児とともに苦難の道のりを歩むのだが，同学園内の活動内容やその効果がいかなるものであり，それらが知的障害児本人の QOL 向上にどうつながっていたのかを明らかにすることを今後の研究課題としたい.